

龍谷大学での生活

——サークル活動について——

高橋 正平
Shohei TAKAHASHI

理工学部電子情報学科 2年



サークル勧誘

大学生生活を楽しむに当たって一番大事なことはサークル・部活動に入ることだった。このことによりたくさんの友達がいろんな学部にできた。自分の入りたいサークルを探すために、入学式と同時にそれぞれのサークルによる勧誘が始まったのでいろいろなところのサークルを聞きに行った。その勧誘の中で、このサークルはどんな活動をするのか、活動日はいつなのか、お金はかかるのか、などを聞き参考にできた。そして、この勧誘だけではなく、サークルが各自で発行しているビラ、情報誌などを参考にした。龍谷大学では熱心にサークル活動が行われているんだと感じた。そして次に行ったことは、それぞれが行っているサークルの発表会、説明会などを見学しに行った。ここでも先輩たちによる、細かな説明によりよりたくさんの情報を得られることができた。そういった体験などをしていき、私は交響楽団というオーケストラを主体としたサークルに入団した。

サークル生活

交響楽団に入団して活動日は、月、水、土だった。その中で日々充実した日を送っていた。大学で

のサークル活動はいろんな行事があった。その一つとしてはフレッシューズキャンプだった。このサークルでのフレッシューズキャンプとは、いろんなサークルがみんなで集まって旅行に行くという、サークルの壁を越えた活動である。この活動により、ほかのサークルがどんな活動をしているか、どんなことを考えているかなどが分かる企画でした。サークルが違うとまったくしゃべる機会がないのに、そのしゃべる機会ができてとてもいい企画でした。このフレッシューズキャンプでは、ほかのサークルの人たちとしゃべるだけではなく、龍谷大学特有の学術文化局というものについての説明が行われました。この説明により、龍谷大学のサークル活動はどのようにして活動しているのかということが分かりました。

学術文化局

学術文化局とは龍谷大学に所属しているおもに文科系の35サークルの活動をやりやすくするために活動している局のことである。このことについて、サークル活動をしていくうえで知っておかないといけないということが分かった。なぜなら、私たちのサークル活動は、この学術文化局があることによって活動できているからだ。つまり、私たちは交響楽

団なので音楽をするサークルである。音楽をするためには、まず楽器がいる。ほかには、練習する場所、楽器を保管する場所、部室、などが必要になってくる。それを大学側に要請してくれるのが学術文化局である。1サークルでは弱いですが、35サークルで言えば大学側も考えてくれ、そういった要望にも応えてくれる。このような仕組みにより、私たちのサークル活動は学術文化局のおかげで成り立っているということが、サークルに入ることによって知ることができた。しかしその学術文化局とは自分たち35サークルの中から『派遣』という形で出さなければならないというものだった。あのような、楽器を置く場所、練習する場所を提供する代わりに、義務として派遣を出し、自分たちで学術文化局を運営しなければならなかった。これにより、たくさんの権利を得ることはできるが、義務を果たすために自分たちのことばかりではなく、ほかのサークルも考えないといけないということが分かった。自分の好きなことをするためには、それなりの義務を果たしそのうえで権利を使うことができるんだということを、この学術文化局により学ぶことができた。

学術文化祭

学術文化祭とは学術文化局に所属している35サークルでやるお祭りのことである。これは今現在も龍谷大学が行っている龍谷祭と同時日に開催されている。しかし龍谷祭と違うところは、学術文化祭はすべて学生の手で行われているということにある。ここではいろんなサークルが日々の活動を見せるために、発表会や演奏会などを開いてお客さんを呼んでいる。交響楽団もその中の一つである。これに参加することにより、日々のサークル活動や日々

の練習成果を見せることができとてもいい機会だった。そして龍谷祭と同じ日にやることにより、お客さんもたくさん入りたくさんの人に見てもらうことができた。そして、ここでは発表会だけではなく、出店などを出し、見に来てくださった方と直接話しかけることができ、私たちの活動をアピールするという目的もあることが分かった。

交響楽団

私が入ることになったサークルだ。年2回の演奏会のために週3回練習している。ほかにも、新入生歓迎演奏会や、学術文化祭での演奏会の練習もしている。



アンサンブルの練習（右端が私）

サークル活動を通すことによってたくさんの友達ができたと何より嬉しいことだ。大学生活の楽しいところは、自分のやりたいことができるということだと考える。なので、私は大学生活を楽しむためには、自分のやりたいことをしているサークルに入ることが大事だと思う。

充実した大学生活

— 瀬田キャンパス —

上 東 朋 寛
Tomohiro JYOTO

理工学部電子情報学科 2年



入学式

龍谷大学瀬田キャンパスに入学式、しかし天候は雨で寒かったのと、風で傘が壊れた記憶と、お線香の記憶しかありません。幸先の良いとは言えなかったですが、キャンパスライフがスタートしました。

初めに苦労したことは、自分の家から通うのに約2時間30分も掛かることでした。入学してしばらくの間は、朝の通勤ラッシュと睡魔との闘いで慣れるまで大変でした。

フレッシュャーズキャンプ

通学に慣れてきて、入学式の次に大きなイベント「フレッシュャーズキャンプ」が行われました。

このイベントは一泊二日間のお泊り会で、大学の施設の使い方、履修登録、サークルなどのいろいろなことを龍谷大学の先輩や教授たちに教えられ、大学で友達を作るための最初のイベントです。最初は緊張しましたが、先輩たちの体験を聞けたり、これから一緒に大学生活を送る友人ができたので行ってよかったと思いました。

サークル

フレッシュャーズキャンプが終わって、一週間ぐらいいは講義に慣れるためにゆっくり過ごしました。それからサークル探しを始めました。大学生活と言えば、サークルと思いいろんなサークルのブースに話を聞きにいたり、活動を見学しに行ったりしました。

最初は龍谷大学の剣道部は強いと聞いていたので小、中、高校ずっと続けてきた剣道部に入ろうかと思いましたが、剣道部は深草キャンパスのほうで活動していて、練習時間にも間に合わないし、家も遠いので断念しました。そして、今の自分が無理せず活動できる条件を満たすサークルを探しました。そして見つけたサークルが龍谷大学学友会学術文化局交響楽団というオーケストラのサークルでした。もともと小さいときにピアノを少しやっていたので多くの人数で一つの音楽を奏でるオーケストラに興味があったので入団しました。交響楽団では楽器体験や新歓演奏会などの催しも合ったので、始めは仮入団という形でいろいろな楽器体験をして、ヴァイオリンを選びました。楽譜が少し読める程度の初心者でしたが、多くの先輩たちに教えてもらって今は50分もある曲をなんとか弾けるようになりました。

龍谷交響楽団

交響楽団は基本的に深草キャンパスで週3日月、水、土がおもな活動日で違うキャンパスですが、瀬田キャンパスから送迎バスも出ており、30分ぐらいでつきます。練習時間も間に合うので毎日充実して過ごせています。練習は厳しく、しんどいですが、サークルならではのイベント、合宿や飲み会、文化祭での模擬店、演奏会など楽しいこともいっぱいあります。特に年に2回行われる演奏会、7月のサマーコンサート、12月の定期演奏会が一番のイベントです。

一回生のときはまだ初心者だったので演奏会にはできませんでしたが、コンサート会場のお手伝いをしながら、先輩たちが作る一つの音楽を聴いて、自分もこんな音楽を奏でてみたいなと思えました。私の初演奏会は一回生の定期演奏会のときで、短い曲一曲だけ弾かせてもらいました。緊張で手の汗が止まらず、無我夢中で弾いていましたが、弾き終わった後の感覚は今でも忘れません。2回生になって合わせて三回の演奏会にできましたが、やっぱり初演奏会時のあの感覚が一番最高でした。

他にも、交響楽団は現在約100人も団員がいて、他のサークルと比べるとすごい人数なので、いろいろな学部の同回生の友人や先輩が多くでき、交流が広まりました。

大学では同じ学部学科の同回生との交流はしやすいですが、他の学部や先輩たちとの交流がしにくかったのでサークルはそのような交流の場でもあると私は考えます。特にサークルの先輩たちにスゴイ人が多くいて、先輩たちと話すことによって、サークルに関することだけじゃなく、講義やテスト対策、バイト、将来など、小さなことから大きなことまで相談できて、自分の考えが広がってとても勉強になります。

おわりに

サークルのことばかり書いてしまいましたが、正直にいうと、講義の勉強もとても大事ですが、人との触れ合いも大事だと私は考えますので、まだ約二年間ですが大学生活送って、私にとって大学生活で楽しいことがあるのは半分以上サークルにあると思います。「他のサークルは？」と聞かれると返答に困りますが、龍谷交響楽団は辛いこともたくさんありますが、そんなサークルだと私は思います。

新一回生には充実した大学生活を送ってほしいので、僕からいえることは、当たり前だと思いますが多くの友人を作ること、何か目標がないとやる気がでないので自分がやりたいことを見つけること（サークル、部活など）、自分の行動に責任を持つことです。充実した大学生活を送ってください。

アフリカ体験記

—— 家族に捨てられた小学生の半生 ——

永井 雄一
Yuichi NAGAI

理工学部物質化学科 4年



1. はじめに

アフリカ大陸に初上陸！

街には貧しさのために物乞いをする子供達，そして内戦によって手足を失った大人達も路頭に迷い歩道で物乞いをしている．村に行くと雨が降れば床上浸水をしてしまう家々．日本では見たことのない状況が日常茶飯事に起こっていました．これは私が見たウガンダの光景です．

3年生の1年間を休学してカナダ，アメリカ，ウガンダのNGOで活動をしてきました．最初はカナダで公園の保護を行うNGOに所属して，モントリオールにある公園の整備作業を行いました．次にアメリカで森林保護活動を行っているNGOに所属し，グランドキャニオンをはじめとする西海岸地域の国立公園の環境保全を行いました．その後ウガンダへ行き，そこでは町から離れた小さな村の小学校で英語と数学を教えました．どれもが私にとってはかけがえのない経験となったのですが，ここではこの中のウガンダでの活動にフォーカスをあてて皆さんにお伝えしたいと思います．

物質的貧困がウガンダの現状

ウガンダとはアフリカ東部に位置しており，「ホ



図1 ウガンダの村並み

テルルワンダ」で映画の舞台となったルワンダ共和国や，マサイ族で有名なケニア共和国に隣接している国です．

1962年にイギリスから念願の独立を果たすのですが，その時からウガンダの悲劇が始まります．当時の大統領・アミンが独裁者で彼による独裁政治が行われてしまったのです．海外技術者や商人を追放し，その結果，資本を失い経済の破綻をむかえました．その後，アミンは追放され，20年近く経った現在でやっと経済が改善され始めてはいますが，まだまだ貧困層の多い国です．

2. 活動内容

小学生は英語がペラペラ？

この国では3ヶ月間、町から離れた小さな村の小学校で子供たちに英語と数学を教えていました。小学1年生から6年生までそれぞれ1クラスずつあり、小学5年生と6年生が私の担当のクラスでした。

(ちなみに何の言語でコミュニケーションをとるのかなと皆さん少し不思議に思うかもしれませんが、ウガンダは元イギリス植民地であったために公用語が英語とウガンダ語の2つになっています。そのため小学生でも英語でコミュニケーションをとることが可能なのです。)

この小学校での活動からある生徒のエピソードを紹介します。そしてそのエピソードから私が学んだことを伝えたいと思います。

3. 実際に働いてみて

孤児だらけの小学校

このエピソードの主人公の名前はデリック。小学5年生・11歳の男の子で両親はエイズで亡くなっています。デリックは姉夫婦の家で生活しており、デリック、姉夫婦、姉夫婦の赤ちゃん、の4人家族で暮らしていました。

ウガンダではエイズ孤児（エイズで両親、または

片親を亡くした孤児）が多く、この小学校だけでも約3割の子供がエイズ孤児という状況なのです。孤児となった子供の行く先は、孤児院に預けられる、親戚に預けられる、またはストリートチルドレンになる、といったものです。デリックもその孤児達の1人でした。

デリックからの SOS

ある日のことです。デリックから1通の手紙をもらいました。手紙にはつたない字でこう書かれていました。「先生へ、いつも授業ありがとうございます。僕は6歳のときに両親を亡くしました。その後は姉の家族の家に住んでいます。でも義父が僕に暴力を振ります。実の子供ではないので愛されていないからです。助けてください。」

実の子供ではないということと義父から暴力を振るわれ、愛情を注がれずに一緒に暮らしているのでしょう。もうすぐ小学校が夏休みになるところだったので、夏休みにデリックの家を訪れてみることにしました。

夏休みに入り1週間目が過ぎようとしていた頃です。デリックの家庭訪問を予定していると、校長先生から衝撃の事実を聞かされました。なんとデリックの家族が、彼を1人家に残して夜逃げをしてしまったのです。晴天の霹靂でした。私は予定を早め、急いで彼を訪れ事情を聞くことにしました。

300円だけ受け取り置き去りにされたデリック

デリックの家は沼地の近辺にありました。1時間ほどの悪路を歩き、最後に膝まで浸かる沼を渡ってようやく着くことができました。

彼は途方にくれていました。姉夫婦から5000シリング（日本円で300円、現地の物価で5日間くらいの生活ができる程度）だけを渡され、すぐに帰ってくると言われ、家に置いていかれたそうです。その後姉夫婦からは何の連絡もなく、受け取ったお金もちょうど底を尽きたところでした。

今でもはっきり覚えています、その時はもう彼



図2 デリックと姉夫婦の赤ちゃん

に対して何をしてあげられるのか何のアイデアも出てこなかったです。姉夫婦を探す手段はありませんでしたし、仮にあったとしてもはたしてデリックをもう1度姉夫婦に返してあげるのが正しいとは思いませんでした。話を聞くことくらいしかその時はできなかったので、何もしばらく食べていなかったデリックを近くの食堂に連れて行き、今後を話し合うことにしました。

その話し合いではデリックの悲しみと空腹を少しは紛らわすことはできましたが、具体的な今後のアイデアは何も出てきませんでした。1日では解決できそうにもありませんでした。校長先生とも話し合う必要があると思い、3000 シリングをデリックに手渡し、その日は別れました。そのお金で3日間生活し、また3日後に会う約をしたのです。個人的にお金を渡すことの良し悪しはありますが、あの時の気持ちはもうそれどころではなく、あのまま何も渡さずにデリックを返すことはできませんでした。

医者になりたい

別れ際、私はデリックに夢を聞いてみました。幼いころから不幸の連続で最悪な生活環境だった彼にはどんな夢があるのか。果たして彼に夢を持つことはできるのか。それを知りたくて彼に夢を聞いてみました。

彼の答えは I want to become a doctor.

医者になってお母さんやお父さんを殺した病気からみんなを救いたい。そのためにいっぱい勉強がし



図3 小学校の生徒達

たいのだと彼は力強く答えてくれました。こんな劣悪な状況に追い込まれていても生きる希望を失わずに、夢を持っているデリックに驚きました。

4. この体験から学んだこと

当たり前の中にある幸せ

このエピソードの結末は良い方向に向いました。校長先生とデリックについて話しあった結果、校長先生の家でデリックを引き取ると言ってくれたのです。3日後から校長先生の家でお世話になり、今でも現地の職員に連絡を取るとデリックは元気に暮らしているそうです。そして夢である医者になるために毎日一生懸命に学校で勉強していると聞きます。

さて今回は1人の小学生のエピソードについてお話をしました。ただこのエピソードは氷山の一角で、ウガンダにはデリックのような境遇の子供はたくさんいます。実際、私が出会ったウガンダ人はデリックのような境遇を持っていたエイズ孤児たちが大半でした。今回はそんな中からデリックをピックアップしたにすぎません。

日本に生まれた私とウガンダに生まれたデリック。同じ人間ではあるけれども生まれた国によって歩んできた人生はまったく違います。私にも小学5年生の時期はありましたが、デリックのような悲惨な出来事には遭遇していません。お金の底が尽きて食べる物に困ったこともありません。

このデリックの体験から、私は今までの人生がいかに幸せに過ごせていたかを再発見することができました。デリックは幼い頃に両親と死別をした一方で、私は両親と一緒に暮らせています。デリックは義父から暴力などの虐待を受けて、最後には捨てられました。その一方で、私は実の両親から大切に育ててきてもらっています。

当たり前だと思っていたこの私の生活は、実は当たり前ではなくものすごく幸せなことなのだ、デリックの体験から学ぶ事ができました。これからは普通に生活できることを当たり前と思わないで、その普通の生活の周りにある1つ1つの出来事に感謝

をしてきくべきなのだと学ぶことができました。

5. おわりに

最後になりましたが、この原稿を書き上げるにあたり終始御指導をしていただいた後藤義昭教授に深く感謝いたします。

教育実習を終えて

——教えることの難しさ——

坂本 篤司
Atsushi SAKAMOTO

理工学部情報メディア学科 4年



1. はじめに

私は教職課程を履修しており、2007年の6月4日から15日の約2週間、高等学校教科「情報」の教育実習に行きました。この記事全般では、実習の話を中心に、私自身が経験したことや感じたことについて記述します。現在、教職課程科目を履修中であり、今後教育実習に行く方にとって少しでも参考になれば幸いです。

2. 教科「情報」とは

教科「情報」は、近年新設された科目です。情報教育の目標は、「情報活用の実践力」、「情報の科学的な理解」、「情報社会に参画する態度」の三点を育てることされています。普通教科「情報」には、情報A、情報B、情報Cの三つの科目があり、教育課程では、この中から1科目が必修となっています。情報Aでは、コンピュータや情報通信ネットワークなどの経験が浅い生徒でも十分履修できるように、情報Bでは、コンピュータに興味・関心を持つ生徒が履修できるように、情報Cでは、情報社会やコミュニケーションに興味を持つ生徒が履修できるようにすることを想定しており、各々の学校が生徒の状況等を考慮しながら対応できるようにな

っています。したがって、「情報」の教育実習は単にコンピュータの操作を教えるということにはなりません。

なお、私の実習先（公立高校）では、一年生において情報Aの科目が設定されていました。公立高校全体で見ると、情報Aが半分程で、情報Bが三割、情報Cが二割となっているそうです。私立高校に実習に行った友人のところは、一年生で情報A、三年生で情報Cの履修となっていたそうです。

3. 教育実習までの道のり

私は、大学への進路を考える時に教師になることを目指し始めました。その時までは、こんな仕事をしてみたい等と目標にしていることはありませんでした。ただ、誰かに何かを教えることとパソコンを触ることが好きで、両方とも活かせる職業は科目「情報」の教師だと単純に考えました。

教育実習に行くためには、それまでに修得しておかなければならない科目があります。私は2回生のときに、土曜日に開講されている科目を落としてしまい、大きくやる気を無くしてしまいました。それから数ヶ月後に周りの人の声もあり、教師への道を再度目指そうと決めましたが、結果的に2回生の時に取得可能な教職課程の科目は、すべて3回生にと

ることになり、この年は非常に忙しくなりました。一度は挫折したものの、その後は順調に単位を取得し、4回生の前期には教育実習に行くことができました。

4. 教育実習において

4.1 実習校について

私がお世話になった実習校は、母校である大阪府立牧野高等学校です。大阪府枚方市の京阪牧野駅より少し歩いた所に位置し、学校の周りにはまだちらほらと畑や田んぼが伺えるのどかな所です。生徒は遅刻をほとんどせず、欠席は日に1~2人しかいません。また、部活への加入も全体の8~9割と非常に多く、自分が高校生の頃と変わらず非常に元気な印象を受けました。

4.2 一日のスケジュール

だいたい一日のスケジュールは表1の通りでした。朝の校門挨拶は生徒一人ひとりの表情をとらえることができ、短い実習期間の中で少しでも多く生徒とコミュニケーションをとるためには、非常に重要だと感じました。実習前半では、空き時間は授業の準備に追われていましたが、後半になると、少なからず時間に余裕ができ他の実習生や先生方の授業を見学させて頂きました。課外活動の指導も教員の大切な仕事の一つなので、多少無理をしても部活の指導に行きました。帰宅後は3時間程仮眠をとり深夜に起きて教材研究をして、そのまま出勤という生活リズムになってしまいました。他の実習生も似た様なことになっていましたが、みんな口を揃えて「どれだけ疲れていても学校に来て生徒達を見たと元気が出る」と言って、不思議がっていました。

4.3 授業

私が担当した授業は一年生の科目「情報A」でした。一年生は7クラスあり、一週間で14コマある中、私は5クラスに一回ずつ、2週間で計10コマを担当しました。実習は図1のLAN教室で行い

表1 一日のスケジュール

8:00	出勤, 校門挨拶
8:35~15:00	授業, 授業見学, 教材研究など
15:00	SHR, 掃除
15:30	教材研究, 部活の指導
19:00頃	退勤



図1 LAN教室の様子

ました。

実際に授業をするためには、まず指導案の作成が必要となります。指導案とは授業の台本の様なものです。説明の順序や話すポイント、実習の内容から授業を行う上で注意する点、生徒に何を伝えたいかを考えて書き上げていきます。私の担当したところは、「情報の収集・発信における問題点」という単元でした。内容としては、著作権や個人情報、情報操作やこれらに関わる法律の話をしました。私の場合、担当する範囲が決まったのは実習初日でした。さらに、初授業はその日から3日後だったため、前半は指導案の作成に追われてしまいました。

初授業はそれほど緊張はしませんでした。反省することは多々ありました。大きな反省は、自分が理解しきれていない所はもちろん生徒には伝えきれなかったことです。つまり、教科書を見て読んだだけの受け売りの様な喋りでは理解してもらうことは困難でした。また、授業を行ってみて驚いたことがあります。それは、クラスによってカラーが全然違

うことです。全く同じ内容の授業をしているにも関わらず生徒の反応がさまざまでした。少し冗談めかした箇所でも、あるクラスは笑ったり、違うクラスでは全く反応が無かったです。同じ内容でも、クラスの雰囲気に合わせて授業をする必要があると思いました。

4.4 HR

私が授業を行ったのは1年生でしたが、担当したHRクラスは3年生でした。つまり、HRクラスの生徒と接する機会は5分程度の終礼の時間が大半となりました。少ない時間の中でもできる限り生徒とコミュニケーションをとりたかったので、幾つかのことを心掛けました。まず、教室清掃を生徒と一緒にに行いました。そして、教室の美化を心がけるようにしました。これは、教室が乱れるとクラスの雰囲気も乱れると聞いたことがあるからです。そして、生徒には任された仕事をしっかりやり遂げるという責任感を養ってもらいたかったので、掃除は決してサボらせないようにしました。

終礼以外ではロングHRでのレクレーションに参加することができ、生徒と一緒に楽しい時間を過ごすことができました。実習最終日には、自身の大学受験体験から簡単なアドバイスと、クラスへの感謝の気持ちを話す機会を頂きました。



図2 HRクラスの様子

4.5 実習を通して

この教育実習を通して一番感じたことは、教えることの難しさでした。このように感じた理由の一つ目に、知識がなければ何も伝わらないことを痛感しました。例えば、5つのことを教えるには、その5を知っているだけではダメであり、5に加えて20や30の知識があって、やっと5の部分が伝わることを感じました。それならば、単純に知識豊富な教授が授業を行えば良いかというそうではありません。単なる知識の垂れ流しでは生徒は興味がなくなります。ある先生から、「良い授業にはストーリー性がある。」という言葉を教わりました。つまり、映画には冒頭から話の伏線やクライマックスへの盛り上げ方まで話に波があるように、授業においても、要点や補足的な要素をきっちりとおさえ、ストーリー性をもって進めていくことが大事であるということです。いかに言葉を選んで生徒が興味を持つような工夫をすることが、良い授業を実践できる道だと思います。完璧な授業というのはいけません。少しでも良い授業を行うために教師という職業は学び続けなければならないと感じました。

二つ目に、実際に教壇に立つことで、「教えること」への責任を感じました。学校という教育の場における授業では、生徒に何かを確実に伝えなければなりません。教える立場から共通して言えることは、「決して嘘の知識は与えてはいけない」。また、先生の主観による偏見等も伝えてはいけないということです。実習中にある先生から、「言うか言わないかのどちらかです」と言われました。これは私自身にとって思った以上にプレッシャーになり、授業中の一つ一つの発言において、言葉を選ばなければなりません。当たり前のことですが、実習において教えることの難しさを改めて感じさせられました。

5. おわりに

実習を終えて、改めて将来をどうするか考えました。たった2週間という短い期間でしたが、実際の

教育現場に身を置くことで教師という職の素晴らしさを感じると同時に、この仕事の多忙さにも気づかされました。現在は、特別研究の傍ら来年度の教員採用試験に向けて準備をしています。

教科「情報」は、近年新設された科目で一見需要が多そうに感じますが、ひとつの学校における単位数が少ない授業だけにこの教科だけで教員を目指すのは難しいそうです。実際に、私の指導教員の先生も情報を4クラス分もち（他の3クラスは非常勤

の先生）、他にも、地学の授業を担当されていました。私も近いうちに数学の免許も取得したいと考えています。

最後になりましたが、実習期間中にあらゆる場面でご指導下さった勝村久司先生をはじめ府立牧野高等学校の先生方、大学からはるばる遠くまで激励に来ていただきました吉見毅彦准教授をはじめ龍谷大学の先生方々ありがとうございました。

ニュージーランド旅日記

——遠き南の島での一期一会——

河本 駿 佑
Shunsuke KOMOTO

理工学部環境ソリューション工学科 4年



1. はじめに

私は理工学部環境ソリューション工学科の学生です。高校生の時は英語が大の苦手科目でセンター試験では人に言えないような点数しか獲得できず、「英語はやりたくない」というのも理系を選んだ理由の一つといっても過言ではないぐらい英語を嫌って避けていました。そんな私が大学2回生の後期に「海外英語研修」という授業を通して海外へ行き、外国の人々と触れ合う機会がありました。それ以来、英語の勉強に大変興味を持ち、3回生の後期から大学を休学してニュージーランドへ10ヶ月間、私費留学をするまでに至りました。英語を勉強しようと思ったきっかけは、「海外の人と喋りたい」という一心でした。私の場合は運がよく、素晴らしい環境と仲間、そしてさまざまなアドバイスをいただいた先生、家族に恵まれていました。今回は私の経験を紹介することで、理系なので英語を勉強しなくてもいい、したくないと考えている人が少しでも海外、語学に興味を持てただけなら嬉しく思います。

2. 北島ぶらり一人旅

ニュージーランドでの10ヶ月間の留学生活の縮

めくりに2006年7月、人生初の一人旅をしました。日本国内でも一人で旅行はしたことなかったのですが、思いきってニュージーランドでの一人旅を試みようと思いました。入国審査の時、愛想笑いの笑顔しかふりまけなかった自分が、この9ヶ月でどのくらい成長したかを見てみたかったというのが一番の理由でした。ニュージーランドは大きく分けて北島と南島の二つの島からなります。それまでに9ヶ月間ニュージーランドに滞在していましたが、南島のクライストチャーチという街にずっとホームステイしていたので北島に行く機会がほとんどなかったのと、温厚な気候を求めて北島に行く事を決めました。正直怖いものみたさもあったかもしれませんが・・・他国での一人旅は、乗り継ぎや宿など心配事がたくさんありました。安全な国ニュージーランドとはいえ、やはり危険な地域があるようでした。ホームステイ先の人に気をつける地域、原住民が多く気の荒い地域、絶対訪れるべき素晴らしい地域などアドバイスをもらい、旅にドキドキワクワクしながらガイドブックを眺めていたのを今でも覚えています。

自分が全てを決める、それが不安や心配から楽しさ、醍醐味へと変わったのは旅の途中でした。移動には全て長距離バスを使い、南島のクライストチャー

ーチを出発し、2,3週間で北島を南から北の端まで行く計画を立て、8つの街や地域を訪れることにしました。最終的には1ヶ月の時間をかけ、南島のダニーデンという街にも行ったのですが、その旅の中でも特に印象に残ったこと、人の温かさをいくつか紹介させていただこうと思います。

3. タウポでのスカイダイビング

ニュージーランドの北島の真ん中に位置する湖畔の街、タウポで人生初のスカイダイビングに挑戦しました。その街はニュージーランド最大の湖タウポ湖の湖岸にある街で、現地の人がいうには世界一安い料金でスカイダイビングを体験できるという事で、これを逃す訳にはいかないと考えていました。価格はだいたい120~300ニュージーランドドルでした。私はニュージーランドに行ったらスカイダイビングかバンジージャンプをやろうと決めていたので、まさしく待ちに待ったアクティビティでした。当日飛行場に行くと、もうすでに空から人がパラシュートで降りてきていました。一緒に飛行機で上空へ飛ぶのは5人で、みんな初めての体験だと言っていました。会話をしていると、全員がすごく緊張していているのが分かりました。着替えをしてほとんど説明がないまま、5人はそれぞれインストラクターと二人一組になって小型飛行機に乗り込みました。腰につけられていた小さなポッシュットが、予備のパラシュートだと知ったのは全て終えてからの事でした。

飛行機は離陸し、みるみるうちに人、車、家が小さくなっていきました。それと同時に緊張感が高まってきて、正直、想像と妄想の繰り返しでした。それを知ってかどうかインストラクターが私を指差して「He is a SUKEBE.」と他のインストラクターに話かけました。思わず私は笑ってしまいそこから10分ほど会話を楽しみました。笑うということが緊張をこんなにほぐすのかってくらい、落ち着きを取り戻しました。

飛行機に乗ってから約20分、高度12000フィ-



写真1 スカイダイビング中の僕

トに到達しました。天気は快晴、少しある雲ももうすでにずいぶん下の方に見え、家は米よりも小さく見えていました。僕の順番は2番目、最初の人を用意だし、飛行機のハッチが開けられました。ものすごい風圧と騒音にみんなの緊張が一気に高まりました。ジャンプの前、飛行機からまず脚をだし、椅子に座るように飛行機の床に座りました。脚の下にあるのは壮大な景色だけ。そして一人目が・・・消えました。ものすごい速さでいなくなりました。それを見てもう覚悟を決めるしかないと思腹をくくりました。3,2,1,の合図で飛び降りた瞬間、まず上空向きで落ちていきました。乗っていた飛行機が恐ろしい速さで離れていくのと、いままで体感したことのない「落ちる感覚」が僕に声を出させました。あれ程真剣に、自然に叫んだのは初めてでした。すぐさま反転し次は地上が見える方向に。そこには壮大な自然の国ニュージーランドを見せつけるかのような緑一面に大きな湖、そして湖岸の街、いつの間にか叫ぶ事も忘れ景色の壮大さのため息がでそうでした。約40秒のフリーフォールが終わり、2分程パラシュートで降りてきました。パラシュートが開いた瞬間自分の体験に身震いがしました。ぜひとももう一度体験したいと終わってすぐに思いました。

4. オークランドユースホステル 412号室

ニュージーランド最大の都市、オークランドでの

ユースホステルに宿泊した時の話です。計2回、4泊と2泊しました。ユースホステルは部屋の人数が選べたので、私はずっと一番格安の4~6人程度のシェアームを選んでいました。全くの知らない人と同じ部屋、人見知りの方には我慢できないでしょうけど、英語をはじめたきっかけが人と喋りたかったので、喋る機会、海外交流するには最高の場所でした。

初日、その部屋には30歳ぐらいのアイランド人がすでに泊まっていました。その人は長旅をしているらしく、マレーシアやタイなどアジアを回って次はFIJIに行くと言っていました。残念ながら日本は物価が高いという事で行かなかったそうです。アイランドは古くから歴史のある国で、他の国々にも多くの影響を与えました。日本にもアイリッシュパブがあります。その時ニュージーランド以外の国を知らなかった僕には、すごく興味のある話が多く、夜12時くらいまで話し込む程でした。その人は2日目の朝に出発して行きました。

入れ代わりにブラジル人が部屋に来ました。その人は学校で英語の先生をしており、休暇を利用してニュージーランドを旅をしている人でした。彼は日本語を少し話せました。なぜ日本語を知っているのか理由を聞くと、ブラジルには日系ブラジル人がたくさんいる地域があり、日本人村があるそうです。結構日本人の人口も多いと聞きました。『出稼ぎ』という言葉は日本人が持ち込んで、今ではブラジル人が日常で使う程日本語がしられているとのことでした。

3日目にインド人が部屋に来て3人になりました。彼らとは凄く気が合い夜中になっても話を続けていました。まるで古くからの親友みたいに。インド人の彼はビジネスをする為にニュージーランドに来たと言っていました。彼はインドの話をしました。恥ずかしながらインドでは英語が公用語になっているということをそこで初めて知りました。インドでは貧富の差が激しいのは有名な話ですが、金持ち3割、貧乏7割で金持ちか貧乏のどちらかしかい

ないと言っていました。そして貧乏な家庭に産まれたら金持ちにはなれないそうです。教養がないからだそうです。教養の重要性を強く話していました。日本は教育に関してはみなが受けられ、恵まれた環境であると強く思いましたが、それと同時に小さい頃勉強が嫌いであまり励まなかった事に少し後悔の念を抱きました。そして彼はベジタリアンで、私にとって初めてのベジタリアンだったのですが凄いいショックを受けました。食べられない、嫌いだけでなく、匂いだけでも、ほんの少しエキスだけでも嘔吐してしまうそうです。話には聞いていたけれど、現実味がなかったというか信じきれないところがあったのですが、彼に会うことでベジタリアンの大変さを知りました。彼はニュージーランドに来て初日に僕らの部屋に来たので、電話のかけ方やコンビニの場所やバスの仕組みなど色々教えてあげました。ニュージーランドでは肉の入った食べ物が多く、食べるものがないと言っていたので2日目の夜に、日本味の野菜カレーを作ってあげる約束をしました。幸い日本のカレーはニュージーランドでも売られていました。作ってあげたカレーを喜んで食べてくれたのが今でもすごく印象に残っています。彼はインドで食べるカレーと同じ味がするとまで言ってくれました。日本のカレーもなかなかのものだと感心しました。私は一度そのユースホステルを離れて、1週間程旅をしてまた帰ってきたのですが、再びチェックインするときにユースホステルの入り口で彼に会いました。彼は僕に同じ部屋を指定するように言いました。私はもちろん喜んで同じ部屋をとりました。私のことを友人と認めてくれたのです。1ヶ月一人旅するなかで、その事が僕にとってとても大きな励みになりました。そしてまた夜中まで二人で話をしていました。空港に行くバスの見送りにもきてくれました。最近は何をしているのか連絡していませんが、彼ともう一度会えるのを大変楽しみにしています。

5. ダニーデンの粋な宿主

旅行の最後、南島でも南に位置する学生の街、ダニーデンという街に行った時の話です。当初行く予定はなかったのですが、誕生日が近かったのでどこかの街で一人で誕生日を迎えるのも悪くないなあと思い、突発的に決めました。バックパッカーに着いたのは誕生日の2日前でした。夜に到着して情報収集をするためにマスターと話をしているときに誕生日の話をしました。そのカウンターに帽子が売られていて、いい感じの帽子ですね、帰る前に一個買おうかなあという話をしました。ダニーデンには世界一急な坂がありギネスでも公認の坂道があります。その坂を誕生日の記念に上ろうと思いこの街へ行きました。当日はあまり天気がよくなかったのですがいい記念になりました。

誕生日の朝、起きてご飯を作っていると、初対面の人から Happy birthday と言われました。どうやらマスターから聞いたようでした。素直にありがとうと言ってご飯を食べていると、マスターが背後から僕の肩を叩き、「誕生日おめでとう。これが今年最初の君の誕生日プレゼントだよ。」と言い、あの帽子をかぶせてくれました。一人旅だったので、Happy birthday のフレーズを聞く事を想像していませんでした。この粋なマスターのおかげもあり、人生で最高の誕生日の一日になりました。

その他にも、掘ればお湯の出るビーチや13人でやっと囲める樹齢2千年の巨大な木、昔刑務所だったところを宿として経営している街、緑や青色の温泉、ティッシュで有名なネピアの語源となった街、先住民の儀式や食事を体験した街、19種類もの違う種類の羊が見られるファームショー、ギネス認定の世界一急な坂、夜歩いていたら石を投げつけられた街、走行中にバスから荷物が落下する事故、2色の海、ビーチを走るバス、偶然に小学校の授業参観に参加、などなど色々な事がありました。今思えば笑えるような出来事ばかりです。



写真2 ニュージーランドは農業がさかんでこんな事もしばしば・・・



写真3 羊の国を代表する19種類の羊達

しかしやっぱりこの一人旅がよかったと思えるのはまわりの人との交流があったからだと思います。ニュージーランドを選んでよかったと思いました。人だけでなく自然も素晴らしいところなのでもし機会があったら是非一度行ってみてください。

私は3回生になってからですが初めて真剣に英語の勉強に取り組んで本当によかったと思います。外国の人々と話ができるだけでなく、人生にも幅ができたのではないかなと思います。内定先の会社では海外営業を希望しようと思っているほどです。だれもが海外に行く事により「いい経験」ができる保障は全くありません。日本もとても素晴らしい国です。しかしこれからの時代、世界はどんどん狭くなり身近になっていき、仕事をすれば海外の方々と接する機会がどこかで必ずあると思います。海外での

生活を体験することは、大きな人生経験になると思います。たとえ短期であろうと長期であろうと、肌で感じることは何かしらの変化を与えてくれるものだと感じています。多くの人に他国の文化や習慣、たとえ街並みや観光だけでも経験していただきたいと思っています。ニュージーランドで私が体験した色々

な出来事をまた皆さんにお話できる機会があればいいなあと思います。最後にこの場をかりて親に感謝の気持ちをいいたいと思います。留学費用だけでなく色々迷惑かけては助けていただきました。親父、おかん、ありがとう。